

Q34. 流水型ダムができることにより、香りも味も良いアユが捕れなくなるのではないのでしょうか。

- 川辺川、球磨川のアユについては、地域の典型的な魚類として注目されている種であると考え、「典型性河川域」における注目種として詳細な調査、予測及び評価等の検討を行いました。
- 具体的には、アユの質や量を維持するためには、餌となる付着藻類の質や餌場、産卵場となる瀬の存在が重要であると考えており、瀬淵構造や採餌環境などアユの生息、繁殖環境の観点で予測、評価を行いました。
- 付着藻類については、流量と付着藻類（クロロフィル a）の関係から、柳瀬地点において  $300\text{m}^3/\text{s}$  程度以上の出水で付着藻類が剥離していることを確認しており、川辺川の流水型ダムでは、流量  $600\text{m}^3/\text{s}$  までは洪水調節を行わないことから、ダム建設後も剥離・更新が行われ、付着藻類の生育環境は維持されと考えられます。
- 更に、洪水調節操作ルールの工夫により、約9割を占める中小規模の出水においては、洪水のピークが過ぎ下流の安全が確認できれば後期放流量を増やすこととしており、これにより、ダム下流域の自然河川の攪乱頻度に近づくことで、付着藻類の剥離・更新が維持できると考えられます。
- 一方で、試験湛水の貯水位上昇時には、ダム放流量が減少するため、ダム下流河川の流量が減少し、瀬は維持されるものの、アユの産卵場や餌場として利用される瀬の面積の減少や平均流速が低減することが考えられることから、環境保全措置として専門家の指導及び助言を得ながら、瀬の整備を行います。
- ダム供用後においては、平面二次元河床変動計算により将来の瀬淵の環境を予測しており、その結果、ダム建設前（ダムなし）と比べアユのはみ跡が最も確認されている平瀬については、ほぼ

同程度残ると考えられます。また、魚類の生息環境として重要な淵については、淵の構造（面積、容量）の変化は小さいと考えられます。

- このようなことから、アユの餌場、産卵場の環境は維持されることが考えられます。なお、調査では付着藻類の質（有機物量と無機物量の比率、付着藻類の種類）についても把握しており、ダム完成後においても引き続き調査を実施し、付着藻類の量と質に関する影響把握を事業者として行っていきます。